

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の  
立場に立って設計しています。  
お気軽にご相談下さい。

## 京都建築事務所

〒 604-8083  
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10  
代表取締役社長 川下 晃正  
TEL (075) 211-7277  
FAX (075) 211-7270  
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

〒601-8382  
京都市南区吉祥院石原上川原町21  
<http://www.create-k.co.jp>

クリエイトかもがわ



TEL 075 (661) 5741  
FAX 075 (693) 6605  
送料何冊でも240円



清水貞夫 著

強制不妊手術国家賠償請求訴訟と津久井やまゆり園事件

障害者の「安楽殺」と優生思想

強制断種・不妊、

A5判160頁  
2000円＋税

障害者を生み育てることが、社会の重荷になると強制不妊手術を強制、障害者は劣者、生存を許されないとして殺戮した津久井やまゆり園事件。別個の問題ではなく、根っこには優生思想が存在している。



ジャクリン・ウオースウィック 著  
仁志田博司・後藤彰子 監訳

世界で初めてのこどもホスピス

ヘレンハウス物語

A5判320頁  
2400円＋税

難病の子どもの「ヘレンハウス」設立と運営、その後の感動的な物語。

●日本のこどもホスピス運動に役立つことを願って



親子に笑顔を届けて  
近藤直子・全国発達支援通園事業連絡協議会 編著

療育って何？

A5判176頁 1700円＋税



障害を診断される前のゼロ歳の時期から「育てにくさ」をもつ子どもと家族を支える大切さと取り組みを、親、OT、PT、保育士、事業所、行政それぞれの視点から紹介。

# ありむら潜さんに聴く

2019年釜ヶ崎の変化は  
日本の大きな転機になる



新今宮駅周辺が大きく変わってきた。シティホテルが急激に増えている。海外をはじめとする流入資本はLCC（ローコストキャリア・格安航空会社）と結びつき、アクセスの良いこの地にホテルを建てつつある。団体旅行客はこの地にお金を落とさず、宿としての利用だけで、よその観光地へ移動する。「星野リゾートはどのようなホテルにするか地域向けに発信するだけでもまだマシ。駅前ホテルには地域での狙いがみえないものも目立ち始めた」と。ありむらさんはまちづくりに関係なく進められているホテル建設ラッシュに戸惑いを見せる。

あいりん総合センターが建てかえられ、この地域は一変する。問題は、長年積み重ねてきた住民・地域参加型のまちづくりを貫き、どれだけ深められるかどうかだ。



この地では高齢化しても働く人や日雇い労働者たちの仕事づくりに取り組んできた。高齢者特別清掃事業（通称：特掃）も進められてきた。この、まち美化パトロールや迷惑駐輪啓発事業もその一つ。

この地での自立とは何か？

働くとは、暮らし、生きるとは何か？

多くの人たちが知恵を出し合ってまちづくりのなかで考えている。



掲示している求人票についてのお問い合わせ



日雇い労働市場も大きく変化してきている。国の政策的な動きもあり、社会保険完備で常用化が推進される一方、日雇いという雇用形態の排除が増えている。

オリンピック関連工事では昔のような寄せ場に労働者を求めるやり方から、大型ワンルームマンション（新旧の大手人材派遣会社が各地で経営）に労働者を囲いこむといったこともおこなわれている。

大阪で万博開催が決まったが、労働力不足のなかでどのような変化が起こるのだろうか？

あいりん地域のまちづくりは、住民や様々な団体が知恵を出し合い、単体の支援から総合的支援（いわゆる社会福祉の総合性）が進められてきた。人として生き暮らすこの地域に集う人々の活動が、2019年から始まるセンター建て替え事業で大きく変わろうとしている。

地域・まちづくりの長年の積み重ね、社会福祉の総合性はこの街の到達だけでなく、日本の地域福祉の展望も潜んでいる。

## ●特集● あすの社会保障・社会福祉を求めて

## 〈座談会・出席者〉

／吉永純／吉住とし子／峰島厚／土田昭一 10  
(石倉康次)

## ●トピックス●

津久井やまゆり園事件再考	松尾悦行	30
ハンセン病療養所沖縄愛楽園 南西諸島最後の取材	編集主幹	36
第16期 理事会概要報告	黒田孝彦	42
第23回合宿研究会 in 京都開催		48

## ●連載●

## 社会福祉研究に人生あり！

社会福祉活動の福祉開拓的な役割について

精神障害者福祉活動の経験を通じて 相澤與一 58

## 相談室の窓から

こだわりの奥にある発達へのまなざし (その2) 青木道忠 62

## 育つ風景

保育園の給食はどうなる!? 清水玲子 64

## 「助けて！」って言ってもええねんで！

子どもの声を聴いて！ Part2 徳丸ゆき子 66

## ひととしてあたりまえに生きたい

ろうあ者の「差別」に向き合う運動 清田 廣 68

## 映画案内

スポットライト世紀のスcoop 吉村英夫 70

## 現代の貧困を訪ねて

社会保障の取り組みを韓国から学ぼう 生田武志 72

## 似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

名人が名人を描くのじゃー！ ラッキー植松 74

## ホームレスから日本をみれば

ありむら潜 76

## 花咲け！ 男やもめ

川口モトコ 77

●表紙の絵●  
神門やす子

みんなのポスト 56 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81/

## ●グラビア● ありむら潜さんに聴く

2019年釜ヶ崎の変化は日本の大きな転機になる

## 声を上げるアイドル 制服向上委員会

結成27年目の女子グループ。「歌える場所があればどこへでも」の精神でライブとボランティアを中心に活動

## ●制服向上委員会の活動について

私たち、制服向上委員会は定期的なライブの他に、いじめの防止、被災地の支援ボランティア、ベトナムの平和村（ベトナム戦争で使用された枯葉剤の後遺症に苦しむ人たちのリハビリや社会復帰支援などを行う施設）を訪問したりするなど、結成当初から社会的活動をおこなってきました。特に二〇一一年の東日本大震災以降は脱原発、憲法九条を守ろう、辺野古への新基地建設反対を訴えて、全国各地の集会やイベントなどでメッセージを発信しています。


## ●どうしてアイドルが社会問題に対して声を上げるのか

芸能人がメディアで政治的な主張をすることはタブーとなっているなかで、アイドルが政治的な集会で歌ったり、メッセージを発信したりしていると驚かれることも多いです。でも、私たちはそれが特別なこととは思っていません。政治や社会のことはなんだか遠いところにあるもののように感じますが、本当は誰にとっても身近なことで、何をするにしても関わってくる問題です。アイドルだからかわいい歌を歌わなければいけないわけではなくて、好きな人と思う恋愛の歌や卒業して友達と別れるさみしさを歌った歌と同じように、自分たちにとっても関わりがあることとして「原発をなくそう」「憲法を守ろう」と歌われてもいいはずだと思います。

## ●活動を通じて政治に興味を持ってもらえるように

学校の授業や友達同士で政治や社会のことについて学んだり、話したりする機会ってあまりないですよ。日本では「みんなと同じ」ということに安心感を覚え





て、自分の意見を積極的に発信することをよしとしないうちにもあります。でも、何も知らないままで大人になって政治意識が自動的に芽生えてくるわけではないですよ。自分から興味をもって関わっていけば視野が広がるし、知らないことについて学びながら発信していくなかで「誰かがいいと言っているからいいんだ」ではなくて、「私はこう思う」と自分の意見を持つことができるようになるんじゃないかと思います。

私たちの活動を通じて、政治や社会に対して興味を持つきっかけになったり、自分が思っていることや考えていることを「言ってもおかしくないんだ」と思ってもらえたりしたら、とても嬉しいですね。

### ●福祉とのかかわり

制服向上委員会として、児童養護施設や知的・身体障害のある方たちの福祉施設を訪問して一緒に歌ったり、基金から一部を贈呈したりする活動をずっと続けています。

政府は防衛予算を削って、福祉に予算をあてるべきだと思います。福祉の現場で働いている方の労働環境が悪いと言われてたり、生活に困っている方に対して必要なケアや支援がされていないことはおかしいと思います。これからはそういうことも訴えていきたいですね。

### ●歌える場所があればどこへでも

これから「歌える場所があればどこへでも」の精神で全国各地の集会などに参加して、若い世代が政治や社会のことに興味を持つきっかけや自分の意見を思った通りに発信していけるような環境ができるように積極的に活動していきたいと思えます。

聞き手・山本 樹



# 一九七九年創刊から四〇年の今年

一九七九年六月、大阪福祉事業財団職員共済会は『福祉のひろば』を発行しました。創刊号の特集のタイトルは、「福祉施設と福祉労働」。この後記に、浦山倫郎うらやま りんろうさんは、「大阪福祉事業財団は、一九四六年五月一日、恩賜財団同胞援護会大阪府支部として設立され、四八年八月一六日財団法人大阪同胞援護会に改組、五〇年六月三〇日大阪福祉事業財団と改称した。財団はこうした『公設民営』の創立から三〇年の歴史を経て面目を一新し、二三現業施設に職員四四五名を擁する大阪最大の総合的民間福祉施設となった。本誌はこの財団で働く職員集団が自由に創り上げる機関誌である。この意味で本誌の性格と役割は、職員集団の実践と理論、運動と連帯の高まりが決めるであろう。創刊号は実践記録の特集とした。住谷馨教授すみやけいのご講評に謝意を表する」と書きました。

『刊行によせて』では、「本誌の目標は、日常の仕事のとりくみを、ありのまま総括し、その励ましあう場とすることです。誰でも自由に発言でき、自由に問題提起のできる『ひろば』です。創刊号は、その第一歩を踏み出しました。ここに掲載された文章は、二〇歳代から三〇歳前半の若い人たちが中心となり、これまで文章をまとめた経験の少ない人たちが、共同して、みんなの力でまとめあげたものです」「仕事の担い手が、自分のことばで日頃の実践を客観化し、課題を整理し、そして実践する。この運動が日常的にみんなのものとなるならば、実践上、理論上、また社会進歩にとってどれ程大きな役割を果たすことでしょうか。日々の仕事をまとめ理論化する作業は、社会福祉の分野では遅れております。『福祉のひろば』

刊行を機会として、皆さんの意識的でねばり強いとりくみが急速に進むことを期待しております。一人ひとりで悩み、考えていることを『福祉のひろば』に集めましょう。また今後、会員の投稿のみだけでなく、広く外からの意見も掲載し、『福祉のひろば』の輪を大きく拡げることが期待しております」。

住谷馨同志社大学教授（当時）は、実践と研究心との講評を書かれました。そこには、こんな一文が載せられています。「忘れてはならないことは施設活動に従事しながら、自分の仕事の総括的な意味も込めてレポートを書くという研究的な実践態度についての評価である。施設の仕事は特有の多忙さと気疲れの連続である。この日常生活の中で、これらのレポートが書き綴られたということに深い感銘を覚える。それもひとつひとつのレポートが情熱に溢れ、研究意欲と対象者への愛情に満ちている。少しでも処遇を科学的に、そしてその水準を引き上げるためにいかにすべきかであるかという努力の集積が書き綴られている。社会福祉の対象は絶えず新しい問題を提起している。その対応は経験と共に新しい創造や工夫や技術が必要とされる。また、集団的な協同作業が中心となるため、従事者の相互理解や合議や討議が民主的に行われる必要がある」。住谷さんは、研究者でなく、現場がレポートを書く意味も指摘されている。実践活動を理論化し、文章化することは大変に難しいことであると。

その一〇年後、総合社会福祉研究所が開設し、『福祉のひろば』の編集が研究所に移管されました。二〇〇〇年四月号からは、月刊誌へと変わります。先日の第一六期第一回理事会では、研究所と会員団体や現場との関係性も論議がなされました。社会福祉の変容、国民の生活や労働の変遷、時代の変化や背景は、当然、読者や福祉現場での変化へとつながります。その変化と『福祉のひろば』を編集させていただいている総合社会福祉研究所も過去を引き継ぐだけでなく、明日への新しい提示が求められていると論議されました。

（編集主幹）